

リコンビナント hCG 製剤における maturation trigger としての有効性の検討

豊山 舞佳¹、小林 亮太¹、岡村 太郎¹、藤岡 聡子¹、森 梨沙¹、井田 守¹、福田 愛作¹、
森本 義晴²

1 IVF 大阪クリニック 2 HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】体外受精において、採卵決定時の最終的な卵子成熟の trigger にはヒト絨毛性ゴナドトロピン（以下 hCG）が最も多く使用される。現在 hCG には、尿由来の製剤(uhCG)とリコンビナント製剤(rhCG)があり、どちらも同様の効果が認められているもののコスト面から rhCG はあまり普及していない。しかし、rhCG はロット間誤差や不純物の少ないことから、安定した効果や副作用の少なさが考えられる。本研究は、maturation trigger に uhCG を使用したが良好な成績が得られなかった患者に対して rhCG を使用し、その成績を比較検討した。

【方法】2012 年 1 月～2016 年 4 月の間に mild stimulation にて採卵を実施した 18 症例 158 周期を対象とした。uhCG 実施群 93 周期と rhCG 実施群 65 周期に分け、各群の採卵率（1 個でも卵子が得られた周期の割合）、採取卵数、成熟卵子率、受精率、胚利用率を比較検討した。

【結果】採卵率と平均採取卵数は uhCG 群 79.6%、 1.5 ± 0.3 個、rhCG 群 85.0%、 1.4 ± 0.2 個で両群に差は認められなかった。一方、成熟卵子率は uhCG 群 57.1%に対し rhCG 群 79.6%と rhCG 群において有意に改善した($P < 0.05$)。しかし、受精率および胚利用率は uhCG 群 80.0%、72.6%、rhCG 群 79.7%、72.9%と両群に差はなかった。

【考察】採卵の最終 trigger として uhCG を使用し良好な成績を得られなかった症例は、卵子の最終成熟に必要な効果が十分得られなかった可能性がある。そこでより純度の高い rhCG を使用することで効果的に最終成熟が促されたと考えられる。本検討より uhCG を使用して成熟卵子が獲得できなかった症例に対し、rhCG を使用することで利用可能胚数が向上することが示唆された。